中国を代表する仏教遺跡「雲岡石窟」（二〇〇一年ユネスコ世界遺産に登録）の諸相を初めて包括的に調査した、日本が世界に誇る不滅の偉業――未公開の図版や最新の論考をまとめた待望の新編集版「第3期」、ついに刊行！

雲岡石窟

――西暦五世紀における中国北部仏教窟院の考古学的調査報告

【全20巻（全42冊）】

第3期刊行（二〇一七年八月）・全3期完結！

- 図版総数四五〇〇点余
- 全ての写真を最新のデジタル処理で補正
- 報告書に未収録だった写真・拓本を新たに精選し、最新の論考を加えて増補

〈総監修〉
岡村秀典（京都大学人文科学研究所）
〈監　修〉
京都大学人文科学研究所
中国社会科学院考古研究所

［発行］科学出版社東京
［発売］国書刊行会

❖監修者のことば

京都大学人文科学研究所教授　岡村秀典

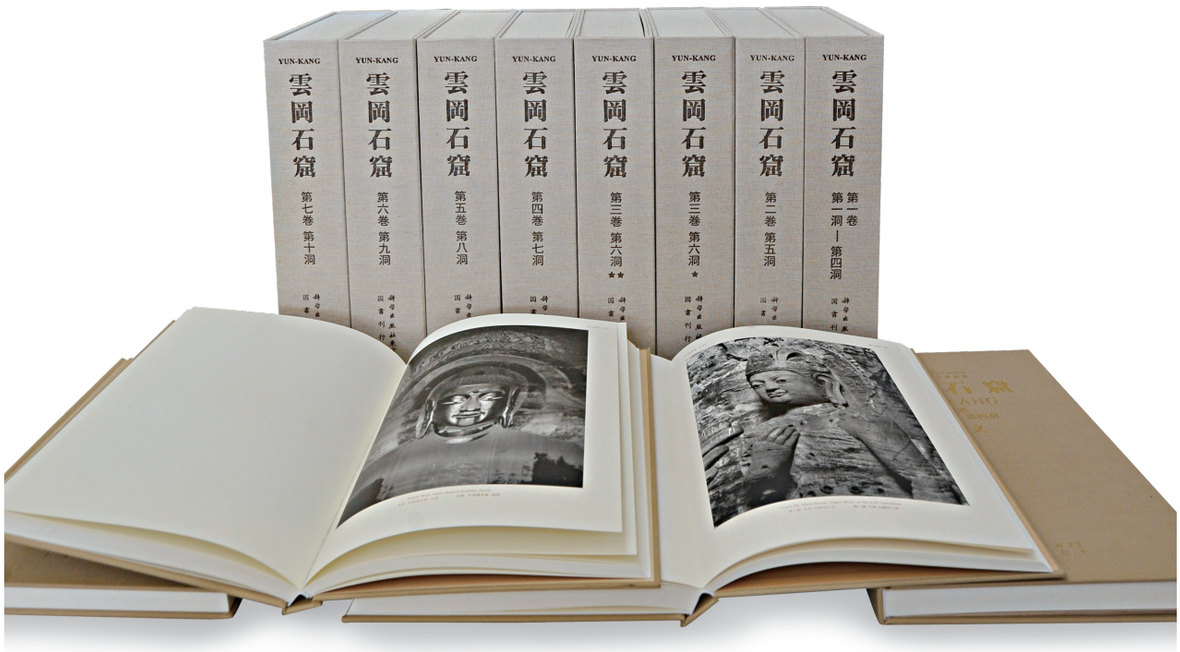
中国山西省大同市に所在する雲岡石窟は、遊牧国家の北魏によって造営された巨石仏群である。東西一キロにわたって高さ三〇メートルほどの断崖を削り、四六基の主要な石窟と二五〇基あまりの仏龕が開かれた。仏像がインドから中央アジアをへて中国に伝わり、敦煌では塑像と壁画からなる小石窟が開かれたが、雲岡では皇帝の強大な力を象徴する巨大仏を石窟内に彫刻したのである。

京都大学人文科学研究所の前身である東方文化研究所は、日中戦争の最中、この雲岡石窟を七年間にわたって調査した。その成果報告として刊行されたのが、水野清一・長廣敏雄著『雲岡石窟』全一六巻三二冊（一九五一～一九五六年）である。B4判、写真はコロタイプ印刷で、本文と図版各一冊で一巻をなし、本文には英文全訳が付けられた。そのボリュームといい、インド・中央アジアから東アジアにいたる研究の広がりといい、世界への発信力といい、日本の人文科学において、まことに空前絶後の偉業であった。

しかし、『雲岡石窟』は公費刊行物で印刷部数も少なかったために、刊行当時まだ国交のなかった中国はもとより、日本でも大学など一部の研究機関にしか設置されていなかった。

このたび中国の科学出版社から中国語版『雲岡石窟』が出版されるのに合わせて、原報告が再び版を重ねることになったのは、日中両国の学術界において、きわめて大きな慶事である。出版にあたっては、原報告の体裁を可能なかぎり残しつつ、写真図版については、最新のデジタル技術を用いて調査当時のガラス乾板から製版した。もとのコロタイプ印刷をしのぐ鮮明な図版になったと自負している。

また、原報告には収録されなかった調査当時の貴重な写真がまだ多く残されている。しかも、原報告の出版から六〇年あまり、雲岡石窟をめぐって新しい研究が積み重ねられてきた。そこで共同研究を進めている中国社会科学院考古研究所と協議し、新たに四巻九冊を増補することになった。この新編集の『雲岡石窟』が日中学術交流の新しい一頁を開くことになれば幸いである。



〈推薦者のことば〉※順不同

京都大学人文科学研究所が世界に誇る石窟寺院研究の金字塔

京都大学名誉教授／同人文科学研究所名誉所員
礪波　護

仏教がインドからシルクロードをへて華北に伝来するにつれ、各地に石窟寺院が造営された。中国の三大石窟である敦煌・雲岡・龍門のうち、隴山山脈の西の敦煌が〈塑像と壁画〉からなる石窟であるのに対し、東の雲岡と龍門はいずれも〈石仏と石彫〉からなる石窟である。そして雲岡と龍門はともに〈石仏と石彫〉からなる石窟であるとはいえ、龍門の岩石が石灰岩できわめて堅いのに対し、雲岡のは掘削しやすい砂岩であった。

東方文化研究所（京都大学人文科学研究所東方学研究部の前身）は、一九三八年から四四年まで、水野清一を責任者とする調査団を七次にわたって派遣した。東洋史を専攻し濱田耕作の指導下に石窟研究を始めた水野は、龍門石窟調査などの豊富な経験を踏まえ、大規模な調査を敢行した。女房役で美術考古の長廣敏雄は四次、写真技師の羽舘易は六次にわたり参加した。報告書『雲岡石窟』の作成にあたっては、中国仏教史家の塚本善隆が大いに貢献し、編集業務を総括したのは、座右宝刊行会の斎藤菊太郎であった。

最初の『雲岡石窟』は、印刷所が一九四五年三月の東京大空襲にあい、製版中の原稿と図版は烏有に帰してしまった。敗戦後に京都大学に合併された研究所から六年かけて刊行された三二巨冊は、世界に誇る偉大な業績である。一九六五年に同研究所の助手になった私は、還暦前後の精力的な水野・長廣両教授から親しく教えをうけたことを懐かしく思いだす。それから半世紀、このたび同研究所の岡村秀典教授が総監修する増補版が、中国社会科学院考古研究所との共同監修で、日本語版と中国語版として出版される。嬉しいかぎりである。

中国における仏教受容の様相を顕著に現わす記念碑

名古屋大学名誉教授
宮治　昭

このたび水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』が日中共同出版として、増補復刊されるという。喜ばしい限りである。

雲岡石窟は北魏仏教を代表する壮大な石窟で、中国最初の本格的な仏教モニュメントである。五体の雄渾な大仏をはじめ、多くの仏・菩薩・天人像、仏伝図や本生図、さらにはシヴァ・ヴィシュヌの門神や飛天、蓮華や唐草など多彩なモチーフが窟内に整然と表され、ガンダーラ・中央アジア美術の影響が色濃く窺われる一方、中国的な仏教受容の様相も顕著に現れており、仏教が中国の大地に根づいたことを象徴する記念碑といえる。

雲岡石窟は仏教文化、中国文化を考える上でその価値は測り知れない。水野・長廣『雲岡石窟』全一六巻は、戦前・戦中に七年間にわたって行われた現地調査の詳細な成果報告書であり、細部にわたる多量の写真のほかに、実測図面（石窟構造、大仏、浮彫彫刻）、刻文、拓本などをほぼ網羅的に集成し、解説、論考を付した、まさに石窟寺院の調査報告書の金字塔である。刊行後、半世紀以上を経て、その価値は減ずるどころか、その後の石窟の損傷もあり、旧版の価値はますます高まっている。

今回の刊行は、京都大学人文科学研究所岡村秀典教授の総監修のもと、旧版を復刊するだけでなく、同研究所に保管された大量の未収録の写真を精選して四巻を増補し、日本語版と中国語版として出版されるという。刊行の意義は極めて大きい。水野清一・長廣敏雄両先生の謦咳に接した者として、深い敬意と心からの祝福を表したい。

全アジア的視野で作品を見る貴重な手だて、画期的な出版

和歌山県立博物館長／京都国立博物館名誉館員
伊東史朗

一九三八年から足かけ七年間かけて行われた水野清一先生、長廣敏雄先生による雲岡石窟の調査は、多角的で周到な実測、多量の写真撮影、および徹底した考察をふまえて、一九五一年から六年間にわたって京都大学人文科学研究所から、その詳細な報告書というべき『雲岡石窟』が刊行された。世界的に見てその先駆性、重要性はいわずもがなであるが、戦前・戦中に調査を始め、終戦後に大部の刊行を遂行されたという事実、わけてもそういう政治的・社会的に困難な時期にあっても学問的使命を貫かれた両先生の強いこころざしに、今ふり返ってことばを失うだけである。もちろんそれを支えた多くの人びとの努力を忘れてはならないが、学界、出版界の偉業であることに誰も異を唱えないだろう。

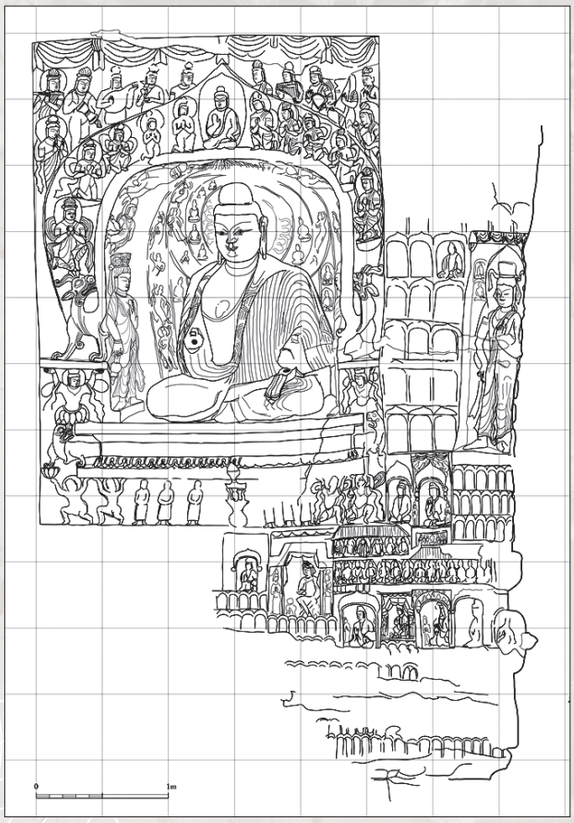
日本彫刻史を専攻する者にとって、雲岡石窟は遠くに聳えるまばゆい存在である。龍門石窟がわが飛鳥時代彫刻の一源流であるとはよくいわれ、実際よく似た仏像に出会うことがある。シルクロードの東の到達点である雲岡石窟ではよく似た仏像には遇わないかもしれないが、図像的原点がここにあるものも少なくない。たとえば、玉虫厨子の各所にあらわされるパルメット唐草や法隆寺金堂壁画の飛天などは、直接的ではないにせよ一本の線でつながれていることは確かである。

中国美術史の専門家だけでなく、日本美術史を専攻する者にとっても、本書は中央アジアを含んだ全アジア的な観点から、美術の伝播やその宗教的意味を考察するうえで基本的な指針となるだろう。

第3期（新編集版）について

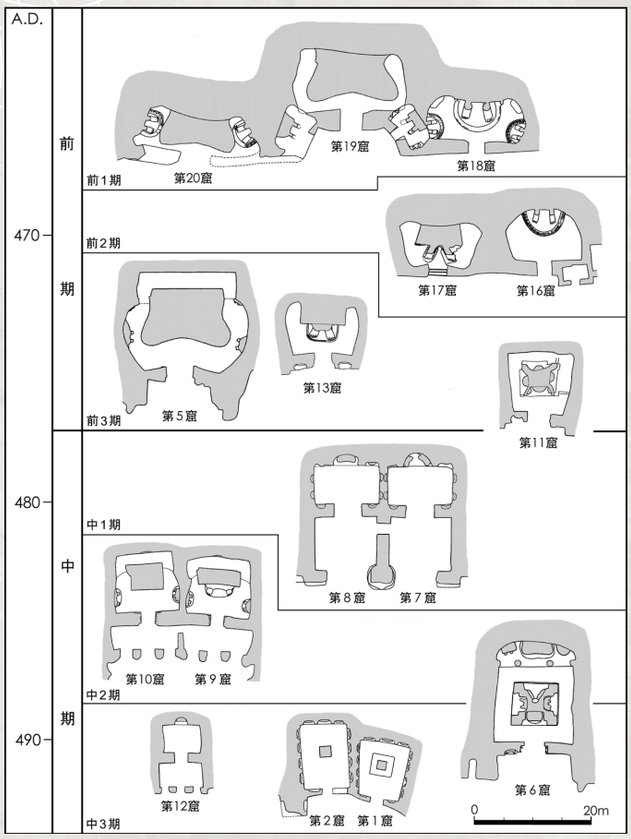
◆いま京都大学人文科学研究所に保管している雲岡石窟関係の写真原板は一万枚、拓本は七〇〇枚をこえている。新編の四巻では、『雲岡石窟』に収録されなかった写真・拓本約一二〇〇点を厳選し、すべての石窟について新たに解説を加える。また、日中両国の研究者による最新の研究論文を掲載する。

◆実測図の一部は一九四五年の敗戦時に北京に留置され、『雲岡石窟』刊行後の一九五七年、中国科学院の郭沫若院長より返還された。未報告であったその第一・第二・第四・第四A・第十六窟の実測図を初めて公表する。



● 実測図（第十六窟南壁西部）

◆原報告の刊行後、雲岡石窟をめぐって、日中両国はもとより欧米においても多くの研究が積み重ねられてきた。なかでも北京大学の宿白教授が、みずから発見した「大金西京武州山重修大石窟寺碑」にもとづいて提起した雲岡石窟の新しい編年は重要である。いま中国では宿白説が全面的に受け入れられる一方、日本では研究者ごとに学説が分かれたまま、接点すらみいだせない状態がつづいている。今回、新中国における考古学的調査と一〇年以上にわたる日中共同研究の成果をふまえ、新しい編年案を提示する。



● 雲岡前中期窟の編年（岡村秀典「雲岡石窟編年論」より）

● （左頁）第二十窟 本尊仏坐像（1923年、澤村専太郎撮影）

◆第二十一窟以西の西方諸洞や山西省各地の石窟については、近年の調査で多くの事実が明らかになっている。本書の論考では、そうした最新の調査成果を初めて公表する。

◆雲岡石窟では一九二〇年代末に軍閥が美術商と結託して彫刻の一部を盗鑿し、東方文化研究所が一九三八年に調査したときには、すでに頭部の失われた仏像が少なくなかった。このため、水野清一らは仏像の破壊前に撮影された古い写真の収集と日本に流出した仏頭の追跡に努めた。今回、岡倉天心の写真助手であった早崎梗吉が一九〇九年に撮影したガラス乾板の写真や、京都帝国大学教授（美術史学）であった澤村専太郎が一九二三年に撮影した写真などを公開する。また、一九二〇年ごろ写真家の山本明・岩田秀則・田中俊逸らが撮影した写真と照合することによって、日本に流出した仏頭の原位置をつきとめる。

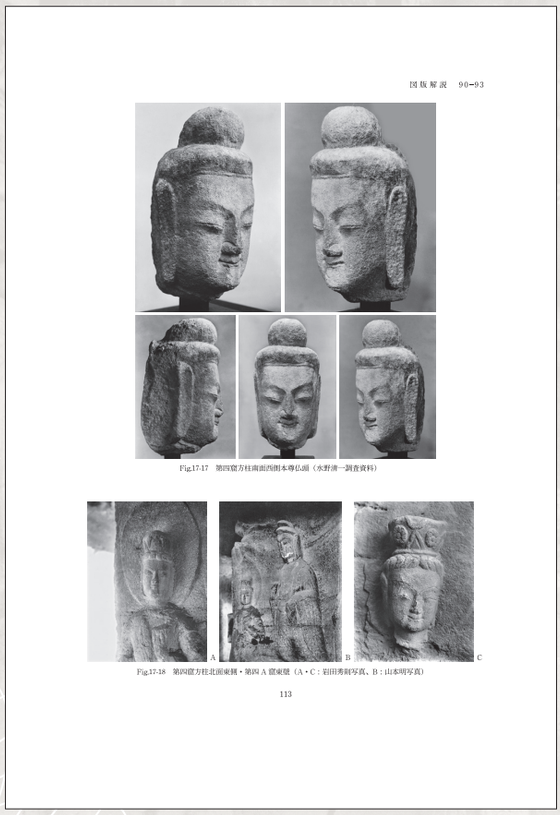

図版解説　90–93

Fig.17-17　第四窟方柱南面西側本尊仏頭（水野清一調査資料）

Fig.17-18　第四窟方柱北面東側・第四A窟東壁（A・C：岩田秀則写真、B：山本明写真）

113

● 第四窟方柱の仏像頭部（水野清一調査資料ほか）

● 第二窟東壁南龕
（上）1923 年、澤村専太郎撮影　（下）1939 年
●（左頁上段）第十一窟西壁上層第 10 龕下 涅槃図（1940 年）

● 第一窟南壁東龕 維摩像
（上）1923 年、澤村専太郎撮影　（下）1944 年

《『雲岡石窟』全巻構成》

巻名	収録内容	配本・価格・ISBN
第一巻	第一～第四洞	第1期（全7巻 15冊） 定価　本体：34万円＋税 2014年2月刊行 ISBN：978-4-336-05693-1 ※分売不可
第二巻	第五洞	
第三巻	第六洞	
第四巻	第七洞	
第五巻	第八洞	
第六巻	第九洞	
第七巻	第十洞	
第八巻	第十一洞	第2期（全9巻 18冊） 定価　本体：38万円＋税 2014年12月刊行 ISBN：978-4-336-05694-8 ※分売不可
第九巻	第十二洞	
第十巻	第十三洞	
第十一巻	第十四～第十六洞	
第十二巻	第十七・第十八洞	
第十三巻	第十九洞	
第十四巻	第二十洞	
第十五巻	西方諸洞	
第十六巻	補遺・索引	
第十七巻	第一～第六窟 図版冊192ページ	第3期（全4巻 9冊） 定価　本体：28万円＋税 2017年8月刊行予定 ISBN：978-4-336-05695-5 ※分売不可
第十八巻	第七～第十窟 図版冊330ページ	
第十九巻	第十一～第十六窟 図版冊210ページ	
第二十巻	第十七～第四十一窟 図版冊235ページ	

本書の特徴

■日本が世界に誇る大著

一部の研究機関に限定して頒布され入手が困難であった、1951年から1956年まで足かけ6年にわたって刊行された報告書『雲岡石窟』（全16巻・32冊）を第1、2期に収録した（本新編集版では全16巻・33冊）。

■報告書に未収録の図版、論考を新編集

加えて第3期（全4巻・9冊）では、報告書に収録されなかった写真・拓本約1200点を厳選して掲載した。また全ての石窟について新たに解説を加え、日中両国の研究による最新の研究論文を収録した。

■図版は最新のデジタル処理で細部まで明確に

京都大学人文科学研究所に残されたガラス乾板のデジタルデータをもとに、最新の技術による処理を施して写真を補正。石窟寺院における建築構造から文様や仏像の細部に至るまで、明確に見てとることができる。

■損傷した石窟のかつての姿を伝える資料群

調査後の石窟の損傷もあるため、当時の石窟の状態を伝える写真、実測図面、刻文、拓本は極めて貴重。資料としてはもちろん、鑑賞用としても後世に伝えるべき至宝である。

本書をおすすめします

■中国仏教美術史、中国思想史、中国文化史などの研究者。
■インドから朝鮮・日本に及ぶアジア諸地域における美術史学、仏教学、考古学、思想史学、建築史学などの研究者。
■文学部の東洋史・東洋思想、美術史、仏教学などの学科。工学部の建築学科など。
■大学図書館、都道府県立図書館など。
■文化財研究所、博物館、美術館など。
■社寺、愛好家など。

B4変型判（375mm×266mm）・上製・布クロス装・各巻ごと美麗函入

最新刊 2017年8月刊行			
第3期	全4巻（9冊）	定価：本体28万円＋税	ISBN：978-4-336-05695-5
第1期	全7巻（15冊）	定価：本体34万円＋税	ISBN：978-4-336-05693-1
第2期	全9巻（18冊）	定価：本体38万円＋税	ISBN：978-4-336-05694-8

発行：科学出版社東京
発売：国書刊行会

国書刊行会
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 TEL:03-5970-7421 FAX:03-5970-7427
http://www.kokusho.co.jp e-mail:sales@kokusho.co.jp

取扱店

◉申込書

ご記入後、お近くの書店へお持ち下さい。

『雲岡石窟』第3期	定価：本体28万円＋税	セット
『雲岡石窟』第1期	定価：本体34万円＋税	セット
『雲岡石窟』第2期	定価：本体38万円＋税	セット

お名前

ご住所

お電話